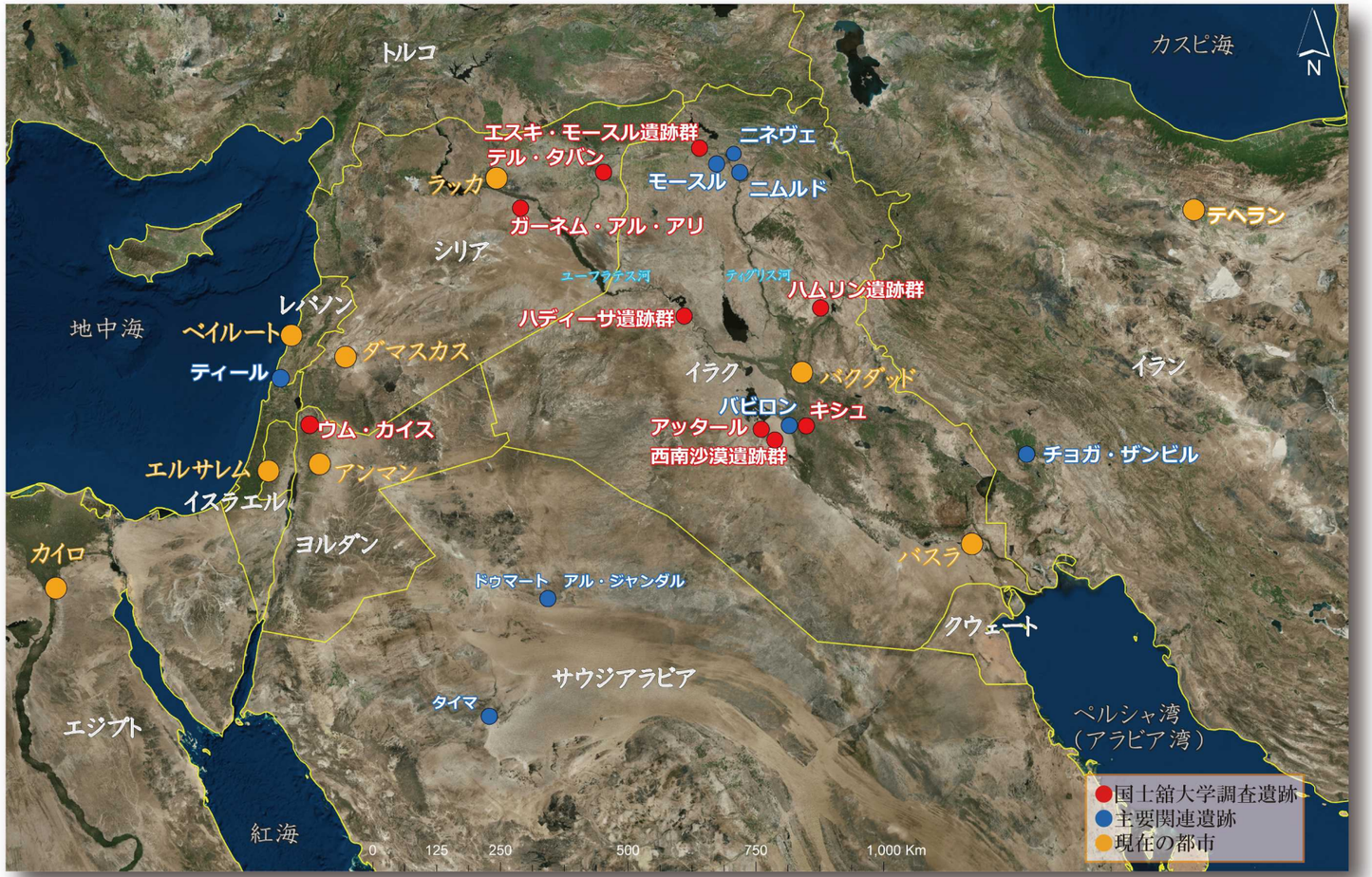
調査地の地図、略年表

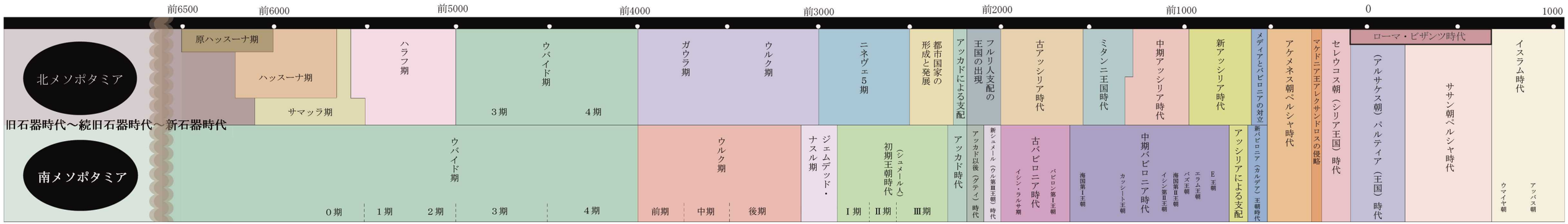
エスキ・モースル
ムシャリファ遺跡出土 眼のシンボル

ハムリン
テル・ソンゴルA遺跡出土　土偶



Source:Esri, DigitalGlobe, GeoEye, Earthstar Geographics, CNES/Airbus DS, USDA, USGS, AEX, Getmapping, Aerogrid, IGN, IGP, swisstopo, and the GIS User Community

国士舘大学調査遺跡



メソポタミア史略年表

NHK「世界四大文明　メソポタミア展」図録、2000年、pp. 28-29より改編

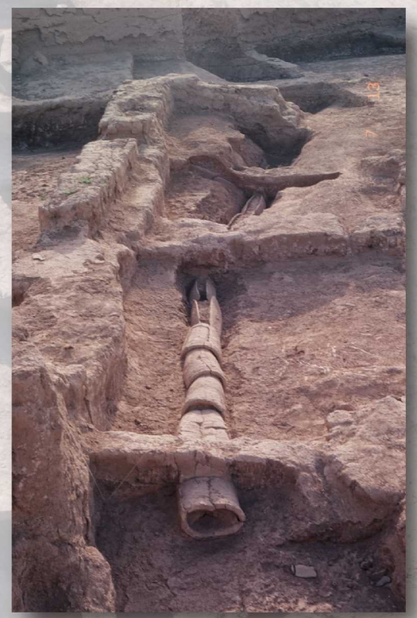
イラク、ハムリンダム水没遺跡群救済発掘調査

バグダッドの北東約110キロのディヤラ川沿いのハムリン盆地に、川を堰き止めてダムを建設するという計画がたてられた。その工事に伴い、水没地域にある遺跡群を救済するための発掘調査をイラク考古遺産庁から依頼された。1977年7月に既に調査をしていたイラク調査団、イタリア調査団の遺跡を訪問し、ハムリン盆地に分布する遺跡群からテル・グッバ、テル・ソンゴル、テルル・ハメディヤートなどを選択した。ヌーリーアミーン村の廃墟（既に村人は移転）の、電気も水もない日乾煉瓦の建物に、またイラク調査団よりテントを借りてきて、とりあえず住み、そしてグッバの発掘に取り掛かった。その後徐々に調査員も増え、発掘遺跡もテル・ソンゴルA, B, C、ハメディヤートと拡大した。調査は3年間継続して行われ、1980年のダム完成によって発掘した遺跡は水没し、泥と化した。以下この調査の成果を時代の古い遺跡から概説する。

１．サマッラ期
テル・ソンゴルＡにサマッラ期の城壁に囲まれた集落、７軒以上、また墓や土器窯が発掘された。サマッラ文化の南限にあたり、その時代既に南メソポタミアに分布するウバイド０期の文化と接触が南のテル・エル・オウェイリーにおいて確認されているが、テル・ソンゴルAでの明瞭な接触の痕跡はない。しかしながら次に来るハラフ文化との争った様子もなく、また接触もなく、サマッラ文化の住民は突然居なくなったように感じる。彼らはどこに行ったのか、と考える中で、南のウバイド０期の文化に合流していったのではないかとも推理できよう。

２．ハラフ期
新たなソンゴルＢ丘の住民となったハラフ期の文化はこれもハラフ文化の最南端に位置し、後期ハラフ期に当たると思われる。ハラフ文化の特徴の一つである所謂トロスも見当たらず、練り土で造られた方形の建物が発掘され、そこからはハラフ文化の彩文土器が出土した。ただ文様は緻密な幾何学的文様などは見当たらず、少々ラフに描かれた土器片が目立つ、更にその上層には十字形の広間を持つ、左右対称の建物で、その床は石灰で塗られ、建物の基礎部分は１ｍ×１ｍくらいの小さい区割りをした基礎壁を造っており、通常の一般住宅ではないと思われる。そのこの十字形の広間を持つ建物がやがて来るウバイド３期～４期に広くメソポタミア中部、北部に分布する十字形の広間を持つ三列構成の建物の基本となったことが十分に考えられる。またソンゴルBの東側にも巨大な長方形の建物（北半分は石灰で床が貼られており、北の入り口には玉砂利を敷き詰めた通路が作られていた、また西の十字形の広間を持つ建物の間には土器製のパイプを南北に（北側から南側へ）繋いで造られた下水装置が発掘された。そしてこれらの建物はタウフ（練り土）で造られ、土器はハラフの土器とウバイド３期の始めの土器が融合したかのような土器の器形、デザインが見られる。またソンゴルAには土器窯がサマッラ期の建物の上層に切り込むようにして造られていた。それはこの遺跡でサマッラ期よりハラフ期が新しいことを証明したことにもなる。

テル・ソンゴルＡ出土の土偶


テル・ソンゴルＢのⅡ層出土の下水管

テル・ソンゴルＢのⅡ層（十字形の広間を持つ遺構）

３．ウバイド期
こうして徐々にウバイド文化と融合しながら、最終的にウバイド３期の文化へと変わる。それはソンゴルＣでの住居（建物の資材はウバイド３期においては日乾煉瓦であるが、ここソンゴルＣ丘においてはハラフ文化の伝統であるタウフ（練り土）で造られていた。ソンゴルＢでの土器窯と大溝、この遺構から出土した土器にはまだ幾分ハラフの要素も見られる。それは胎土は粘土質、表面には化粧土スリップが掛かっている場合もある。彩文は暗褐色に赤や紫色、デザインは動物文、植物文、更に幾何学文も細かいデザインも多くある。またソンゴルA丘での墓が発掘され、墓に使用された副葬品として土器は形式、彩文のデザインもハラフの要素はなくなり、ウバイド３期初期の典型的な土器となっている。またこのウバイド３期のハムリン地域の遺跡群は、南メソポタミア文化が北上していく過程にあるもので、サマッラ期、ハラフ期の遺跡の数と比べるとその数は多く、ハムリン盆地内におけるウバイド３～４期の人口は急増していたといえる。

４．墓地となったテル・ソンゴルＡ、Ｂ
この後のソンゴルは墓として使用され続けた。恐らくグッバのジェムデッド・ナスル期の墓、また恐らくソンゴルの北側にあるバラダーン遺跡のイシンラルサ・古バビロニア期の墓に利用されたのであろう。そしてそれらの墓は数個の土器の副葬品をもつ、通常の墓と思われる。ただ注目されるのはスカラベの印章が副葬品としてあったことで、遠くハムリン地域まで、エジプトの影響があったということを示している。

テル・ソンゴルＢのⅠ層のウバイド期の土器窯

サマッラ期の土器

ハラフ期の彩文土器

ウバイド３期の彩文土器

イラク、ハムリンダム水没遺跡群救済発掘調査

５．ジェムデッド・ナスル期
このウバイド３期以降はテル・グッバに建設された円形建物のジェムデッド・ナスル期の時代まで、待たねばならない。この円形建物は極めて珍しく、メソポタミアではそれまで知られていなかった。その上、ジェムデッド・ナスル期の遺跡はこのハムリン盆地でも他に確認されていない。一般住居も見つかっていないのに、突然、八重の壁をもつ直径約８０mの大建造物が草原に威厳をもって構えている。この建物は恐らく穀物倉庫を兼ねた神殿のような機能を持つ公共の建物であったのだろう。それを仕切っていたのはやはりディヤラ流域の南の都市、更に南に勢力を有するジェムデッド・ナスル期の都市であったのであろう。なぜならこのハムリン盆地はディヤラ川下流域同様に古代より肥沃な穀物地帯であったからである。

ジェムデッドナスル期の土器

スカーレットウェアー

テル・グッバⅦ層の円形建物

６．初期王朝時代I期
そのジェムデッド・ナスル期も続かず、円形建物も破壊され、替わって初期王朝時代I期を迎える。テル・グッバも再建されるが、円形建物の中央部及び周壁だけは残っていたようであり、その中心部の円弧と外壁との間に放射状に建物が建てられた。小さい方形の基礎が並列する遺構は穀物倉庫と思われる。その建物が並ぶ中に、円弧に反った一部屋の大きめの建物が検出された。これらは南メソポタミアで見られる形式であり、神殿であろう。これらの建物から出土した土器はディヤラ川流域の遺跡でよく見られるスカーレットウェアー（緋色土器）と呼ばれるもので、山羊やロバ、鳥を中心に、中には人物文も描かれている極めてユニークな彩文土器である。南には初期王朝時代の刻文などを描いた土器、北にはニネヴェ５期の土器を持つ土器が分布し、それぞれが特色ある土器文化を持っていた。この初期王朝時代のメソポタミアの中心地が後で紹介するキシュ遺跡であり、北に分布していたニネヴェ５期の文化を持っていたのがエスキ・モースル地域のジガーン遺跡、スウェイジ遺跡などである。

【研究成果】藤井秀夫編著『ラーフィダーン』第2巻(1981)：特集記事、イラク、ハムリン発掘調査概報、他、『ラーフィダーン』第5－6巻(1984－85)、第9巻(1988)、第10巻(1989)、第11巻(1990)、第12巻(1991)、第14巻(1993)、第16巻(1995)：ソンゴル特集号、第17号(1996)

７．初期王朝III期
グッバでは初期王朝III期以降も細々と住んでいたようであるが、かつての円形建物は北部メソポタミア即ちニネヴェ５期土器文化圏に向かって伝播して行った。小ザブ川流域のアブ・ナメルにおいて同様の円形建物が見つかっている。そしてハムリン盆地内でも初期王朝III期になって中央部に屋根のない円形建物が発見されている（Uchi Tepe）。

８．メディア時代
グッバではII層即ち表層近くにおいて、極めて頑丈な城砦が発掘された。この城砦はイランのヌシ・ジャン遺跡などに類似しており、メディア時代（BC600年頃）にあたるだろう。この時期にも突然、城砦のみがこのハムリン盆地に築造されているが、出城のような役目を持っていたのであろう。

９．ササン朝時代
この地域で最も新しい時代の遺跡はテルル・ハメディアートでササン朝時代の土器窯及びワイン醸造施設が発掘された。これらの所有者は何処なのか、他にこの時代の遺跡は見当たらないことから、遠方よりこの周辺に来て、葡萄の醸造や土器つくりなど、ここを工房として使用していたのであろう。

１０．　ハムリン盆地という地域は文明の中心ではないが、肥沃な地域であり、南北メソポタミアの文化が接する地域である。またイランからの交易路が交差するトライアングル地帯であり、何時の時代も重要な拠点となっていたといえる。

１１．　1982年4月：「イラク、テル・グッバ第VII層発掘の建築遺構復原に関する研究」テル・グッバ模型完成。

１２．　1990年6月：イラク北東部アダイム遺跡群予備調査　1990年6月　研究代表者：藤井秀夫、井博幸

【調査活動】
科研費(研究代表者：藤井秀夫)
イラク、ハムリン盆地遺跡群、テル・グッバ、テル・ソンゴルA,B,C、テルール・ハメディヤートの発掘調査
1977年９月～1980年12月：年間をとおして、発掘調査がなされた。
調査団
団長：藤井秀夫
考古班：井博幸、大津忠彦、大沼克彦、小口裕通、小谷仲男、鎌田博子、川又正智、篠原徹、松原隆治、松本健、八木和美、横山昭一
修復・保存班：青木繁夫
形質人類学：石田英実、河畑正敏、神田早苗、那須孝悌、和田洋
建築班：井口直己、伊藤重剛、岡田保良、桐敷真次郎、黒川直樹、小林文治、西川幸治、濱崎一志、星和彦、堀内清治、吉沢政巳、
イラク政府代理：モハメッド・アブドッラカーデル・アルモッサ、マフムード・イスマイリ・マフムード、アハメッド・モタル・アレード、サラハディーン・ハメド・フェリド

【研究協力者】
井光代、井熊摩耶、稲葉素子、牛木久雄、江本義理、岡田浩海、五味玲子、白石律子、高橋千鶴子、中川善兵衛、平尾良光、宮越洋、山崎一雄、依田泉、渡辺直経

【研究協力機関】
文部省、外務省、在バグダード日本大使館、在京イラク共和国大使館
清水建設技術研究所、日産化学工業中央研究所

8重の壁で造られていた円形建物

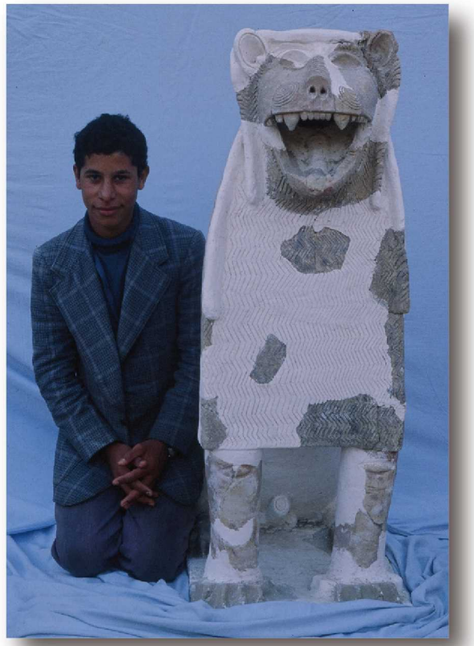
円形建物の内部

イラク、ハディーサダム水没遺跡群救済発掘調査

ハディーサ地域は、シリアとの国境にも近い、ユーフラテス河中流域の右岸に位置している。気候は南メソポタミアに近く、年間降雨量は100㎜以下であるため、すべてユーフラテス河に頼っているといえる。ユーフラテス河は広大なシリア沙漠を浸食しながらメソポタミア低地に向かって流れている、その侵食によって造られた河の両サイドには狭い氾濫原の平地があるのみで、そこには果樹園、畑などが細々と作られている。河から直接灌漑することは困難であるため、古くから水車による揚水が行われている地域でもある。
ハディーサ地域はユーフラテス河中流域の中でも耕地が狭く、旧石器時代の石器分布は認められるものの、新石器時代の遺跡はシリアまで行かないと確認されていない。こうした環境はイラク西南沙漠（タール・ジャマル遺跡など）、サウジアラビア、ヨルダン沙漠、そしてシリア沙漠などの旧石器時代の遺跡分布からもわかるように、旧石器時代この地域は、現在の乾燥した沙漠の環境とは異なり、中小動物の生息する狩猟、採集が可能な草原地帯であったと推測できる。沙漠化が進んだ新石器時代には、ハディーサ地域に人々が住んだ形跡は見当たらない。

イシン・ラルサ期の土器

ハディーサ地域が活用されはじめたのは、少し上流の都市、マリが交易都市として発達した初期王朝期（紀元前2900年～紀元前2334年）になってからと思われる。ユーフラテス河と沙漠を介した交易の要衝の都市として栄えたマリは、東地中海沿岸地域、シリア、レバント地域と南メソポタミアとの交易で潤っていた。
国士舘大学が発掘したハディーサ地域のオウシーア遺跡は、河岸段丘上に位置している。上流のマリが最後に栄えていた時期（紀元前18世紀前半）にあたると考えられており、岩盤を彫り込んだ大規模な石組遺構、および石膏貼りの床面をもつ施設が発掘されている。石組遺構は、前室を伴う対の部屋と背後の一続きの部屋から構成されており、円筒印章を含む、多くの出土品が発見されている。一方、上部の円形石膏貼りの施設には階段、排水施設が、さらに周囲に石膏貼りの部屋も確認されているが、浸食が著しく、全体像は推測の域を出ない。上部施設に伴い、等身大テラコッタ製のライオン像が多数出土しており、これらは神殿の入り口を守る守護像だと考えられている。類似のライオン像が出土していることから、下流域の都市国家、エシュヌンナとの関係性も議論されている。
オウシーア周辺には、他に、人工的に建造されたテル状のマウンド、多数の墳墓、居住地が発見されており、地域の中心的な街だったと推測されている。



テラコッタ製のライオン像

森の守護神フンババ

オウシーア遺跡と遠くに見えるのはユーフラテス河

【調査活動】
1981年～1983年　私学振興財団（研究代表者：藤井秀夫）
第1次調査：1981年5月～12月、アブソール遺跡
第2次調査：1982年5月～7月、ライヤーシ遺跡
第3次調査：1982年10月～1984年1月、オウシーア遺跡

【研究分担者】
井博幸（考古学）、糸賀昌昭、大沼克彦（考古学）、岡田保良（建築史学）、小口裕通（考古学）、小口（八木）和美（考古学）、沼本宏俊（考古学）、松原隆治（考古学）、松本健（考古学）、山崎やよい（考古学）、横倉雅幸（考古学）、吉川守（シュメール学）

【研究成果】
テル・アブ・ソール遺跡「テル・アブ・ソール」1981, 発掘調査概報『ラーフィダーン』第3－4巻(1982－83)他『ラーフィダーン』第11巻(1990)に掲載、藤井秀夫他「オウシーヤ遺跡A区、B区発掘調査概報『ラーフィダーン』第5－6巻(1984－85)他、『ラーフィダーン』第13巻(1992)、第19巻(1998)、第20巻(1999)、第21巻(2000)、第23巻(2002)、第25巻(2004)などに掲載。

イラク、キシュ遺跡発掘調査

国士舘大学はイラク西南沙漠アッタール洞窟、ディヤラ川流域のハムリンダムサイト、ユーフラテス河中流域のハディーサ・ダムサイト、ティグリス河上流域のエスキ・モースルダムサイトなどメソポタミア周辺地域各地でメソポタミア文明研究を長く行ってきたが、ダムサイトの遺跡救済発掘調査が一段落着いた段階で、それらの成果をさらに深めていくためにも、所謂メソポタミア文明の中心地での調査研究が求められた。その結果、イラク考古遺産庁との協議によってキシュ遺跡が浮上し、また1920～1930年にわたって発掘し、大きな成果が挙げた米(シカゴ大学)英(アシュモレアン博物館)の両調査団とも協議の上、イラク政府より発掘許可を得ることができた。
第一次調査はアイン・シャーイア調査から分離して発掘調査を始めたことから、少々準備不足の感があったが、とりあえずキシュの発掘調査を始めることができた。かつての調査隊が発掘したＹトレンチの断面をクリーニングしながら、新たな発掘地Ａ地区のＡ神殿（初期王朝時代）の側にＪＡ区を設定して、測量を行った。その結果はＹトレンチは断面を削っただけのクリーニングだったので遺物は少なく、土器片も小片のみで、層位の状況は赤色層など明瞭であるが、遺物による時代の断定は不可能であった。ＪＡ地区の平面図作成はインガラのジッグラトの頂上にあるＢＭを基準にして測量を試みたが、そのＢＭは掘り返され、壊されていた。そこで独自に設定して測量した。ＪＡ地区はこのＡ丘の西側の１ｍ程の高さを持つ地区であり、その南側には土器窯などの窯カスが散乱していた。北側が緩やかな傾斜となり、Ａ丘とも近いのでＡ神殿に関連する時代及び遺構が発掘されることを期待した。その結果、表層に近い層からは新バビロニア時代の建物が検出され、その下層は初期王朝時代の恐らく神殿と思われる遺構が発掘された。この遺構は新バビロニアの建物を建設するときに削られ、整地されたのか、建物の残りは少なく、すでに壁がなくなっている箇所もあって、全体プランは明らかにできないが、3列構成を成していたことは間違いなく、また中央の広間にプラノコンベックス型焼成煉瓦を敷いた禊の場所（清めの場所）も発掘されたところから、3列構成の神殿と解釈している。この遺構の下層も試掘したが広く黒っぽい泥（長く、泥の状態にあったような泥の堆積）が、しかも深く、おそらく1.5m以上の堆積、そして地下水が出てきたので、その時点で試掘は中止した。また表層は多くの新バビロニア時代と思われる墓が発掘された。
第３次調査は発掘地をＪＰＣＢ地区に設定した。この地域はプラノコンベックス建物（ＰＣＢ）といわれ、発掘されているため、キシュの一画が明らかになっている。この一帯は平坦となっていて、テル状にはなっていない上、発掘前から既に地表に壁のラインが見えて、直ちに建築遺構が検出できるようであった。また平坦なことから、ＢＭとグリッドを設定した。同時にこの一帯の地形図を作製すべく、周りにポイントを設定して、広く地形図を作製するようにした。このＪＰＣＢの発掘は簡単なクリーニングで済むかのようであったが、表層に小型の焼成煉瓦を使用した遺構が残存していた。またトレンチの南端では黒っぽい堆積が広く厚く分布していた、その中に初期王朝と思われる土器が副葬された墓が２基検出された。中央では方形の広間を取り巻くかのように何十にも壁が造られていた。これだけの規模の建築物は広間の状況からも恐らく宮殿であろう。その一画を掘り下げると、粘土質の２ｍ以上の堆積が発掘された。これはアッカド時代にナラムシンと戦ったときに破壊された層かもしれない。
更に広く全体プランを明らかにすることが出来れば、メソポタミア文明の一端が明らかにされ、その結果から、他の遺跡との比較研究をすすることにとって、地方の、またセンターであるキシュの多くの問題が明らかにされよう。今このキシュに求められているのは、古から常に文明の中心にあったキシュの層位を明らかにし、自らの編年を確立することが求められる。
キシュ発掘では、慎重に発掘をすすめなければならないという気持ちと同時に、歴史を変えるほどの大発見をも期待しただろうと自ら振り返ったが、その時の興奮は今なお熱く持ち続けている。
しかしながら、イラク情勢は未だに不安定で、1991年1月17日～2月28日にイラク、クウェート侵攻、そして湾岸戦争、その後イラクに経済制裁が科され、経済活動はもとより、文化遺産関係も活動が制限され、科研費の使用もできなかった。そして2003年のイラク戦争、2015年のISとの戦い、2017年9月のモースル奪還など、不安定な政情が今なお、続いている。そしてキシュ発掘を始めるときに建設した遺物倉庫にはまだ1片の土器も収納されず、空のまま、我々の発掘再開の日を待っている。

ＪＡ地区の発掘

ＪＡ地区から出土した甕棺墓

ＪＡ地区から出土したスタンプ

ＪＰＣＢ地区の建物跡の状況（プラノコンベックス型煉瓦が確認できる）

ネブカドネザル王が建設した神殿

【調査活動】

第1次：1988年12月～1989年3月、JA地区発掘（研究代表者：藤井秀夫）
第2次：2000年11月、JPCＢ地区測量及び発掘（研究代表者：松本健）
第3次：2001年9月、JPCＢ地区　9.11テロで帰国命令（研究代表者：松本健）

【研究協力者】
大沼克彦（考古学）、岡田保良（建築史）、小口裕通（考古学）、小口和美（考古学）、戸田有二（考古学）、松本健（考古学）、吉川守（文献学）、依田泉（文献学）、渡辺広勝（地中レーダー）
事務職員：上田澄江、佐藤芳郎

【調査成果】
松本健「キシュ発掘調査報告」1988－1989『ラーフィダーン』第12巻(1991)、第23巻(2002)、第25巻(2004)に掲載。